

広田照幸さん

(日本大学文理学部教授)

子育て、しつけは誰のものか？

子どもをもつ親にとって、子育ての悩みはつきないもの。各家庭が悩み、直面している問題の背後で、日本人の子育て観そのものが問われているのではないかと。教育社会学者の広田さんに話を聞いた。

家庭の教育力は低下した？

青少年による凶悪事件などが報じられるたびに、「家庭のしつけが崩壊した」とか「しつけが学校任せになっている」などと、家庭の教育力の低下を指摘する声メディアを賑わせます。

しかし、歴史的にみて日本人は、そんなにしつかりと家庭で教育を実践してきたのでしょうか。「昔はよかった」と手放して過去を賛美する前に、歴史的な流れをきちんと振り返って、見落とされている部分をき

つちり拾っていくことが必要なのではないかと思いません。

まず押さえておきたいことに、昔は、生まれてきた子どもが必ずしも無事に成長するものだと考えられていなかったことがあります。乳児死亡率を見ると、大正時代では出生児千人に対して百七十人ほどが、昭和十三年の段階でも百十四人が死亡しています。死因の大半が肺炎や激しい下痢によるものです。

さらに二、三歳になるまで無事に成長しても、その後、事故死してしまうことも珍しくありませんでした。たとえば大正末の山形県の地方紙をひもといてみます

ありませんか？

私自身、川遊びで水に落ちて兄に助けられたり、山で遊んでいる最中に斜面を転がり落ちたりと、まかりまちがえば命を落としていたような経験が何度かあります。昔の子どもはのびのびと育ったといわれますが、それは危険に満ちた子ども時代を生き延びられたからこそそのノスタルジーでもあるんですよ(笑)。

要するに、子どもというものは突然の病気や偶発的な事故に遭ったら、否応なく死んでしまうものだと認識されていた。乳児死亡率の高かった時代は、元気に無事に育ってくれることが、まず第一だったのです。

乳児の死亡率が低下してくるのは、一九二〇年代になって、第一次大戦後の内需拡大で生活水準が上がり、栄養状態がよくなってきてからです。上下水道などのインフラもしだいに整備されて、まず都市部から乳児死亡率が下がり始めます。

一九三〇年代以降になると農村部での死亡率の高さが社会問題になり、三四年には母子愛育会が創設されてこの問題への取り組みがなされます。そして戦後になって、四七年の児童福祉法の制定によって妊産婦・乳幼児の生活指導や未熟児医療などが進められ、六五



●ひろた・てるゆき 一九五九年広島県生まれ。東京大学大学院教育学研究科博士課程修了。南山大学助教授、東京大学大学院教育学研究科教授などを経て、現在は日本大学文理学部教授。教育学博士。専門は教育社会学、教育史、社会史。主な著書に『陸軍将校の教育社会学』『日本人のしつけは衰退したか』『教育には何ができないか』など。

と、わずか半年ほどの間に庄内地方だけで、二十人も子どもが水の事故で亡くなったことが報じられています。よちよち歩きができるようになった幼児が、誰もみていないうちに、ヒザくらいの深さの用水路に落ちて亡くなったということは、珍しい事故ではなかったのです。

ところで皆さんは、子どものころ、野や山で遊び回っているうちに死ぬような思いをした、なんてことは